

民話劇

けみんわ

民俗学でいう昔話や伝説に基づいた

劇作品。東洋、西洋を問わず、民話を原作としたり、それをモチーフにした作品は少なくないが、我が国では、木下順二が、戦中に習作を書き戦後に発表した『夕鶴』（一九四九）、『彦市ばなし』（四七）、『三年寝太郎』（四七）など、日本昔話をモチーフにした一連の作品が、多くの観客に支持され、専門劇団によってだけでなく、地域演劇や学校演劇の演目としても広く上演されたことが契機となって、民話劇という用語が一般的となり、劇作品の一ジャンルとしても定着するようになった。『夕鶴』は佐渡の昔話をモチーフにして書かれた作品だが、戦後、ぶどうの会によって上演（四九、初演）されて好評を博し、オペラや絵本にもなり、国語教科書に収録されて、広く知られ、民話劇という用語を一般化させるものになった。地域演劇や、児童劇、学校劇の一ジャンルとして、民話劇は欠かせない位置を占めているといつてよいだろう。

（富田博之）

ム

ムーア アン キャロル Anne Carroll Moore

一八七〇—一九六一 アメリカの児童図書館員、児童文学者。アメリカの児童図書館を組織づけ、児童文学に正当な評価を与えた功労者。ニューヨークのプラット・インスティテュートで図書館学を学び、同図書館の児童室長を経て、ニューヨーク市立図書館の児童室主任となる。子どもを尊重した図書館活動は、当時の児童室に新風を送り込んだ。児童文学の分野では、新聞や雑誌、とくに書評誌に定期的に書評を書いて、児童文学評論を確立させた。また、長年にわたり、児童文学書評誌「ホーンブック」の副主筆を務め、アメリカ児童文学の質の向上に貢献した。主著、『The Three Outs and Three Ins』（一九二五）や『My Roads to Childhood』子ども時代に通じる道（三九）をはじめ、数々の評論を発表する一方、アメリカ、欧州各地での講演を通じて、児童文学や児童図書館の在り方に指針を示し、

図書館員、作家、出版界に及ぼした影響は大きい。

(白井澄子)

昔話^{ばなし} 民衆の間で、口伝、えされてきたお伽
 噺^{*}。柳田国男は、神話時代に記録されなかつた英雄の
 生涯の物語があつたはずで、それがいくつもの部分に
 分かれて口伝えされてきたのが昔話であると考へた。
 そして、一九四七年に発表した『日本昔話名彙』にお
 いて、そのような昔話を「完形昔話」とし、その一部
 が独立して笑ひを呼び起こすような笑ひ話や、英雄の
 周辺にいた動物たちのみによる動物昔話を、「派生昔
 話」と呼んだ。二分類法という。これに対し、関敬吾
 は、五八年に完結した全六巻の『日本昔話集成』にお
 いて、「動物昔話」、「本格昔話」、「笑話」の三分類法を
 提示した。これは、昔話の分類カタログとして現在世
 界的に使われている、A・アールネ、S・トンブソンの
 「昔話の型」The Types of The Folktales の三分類
 法にほぼ対応するもので、現在の日本昔話研究では、
 ほとんど関の三分類法が使われている。日本の昔話は
 約一〇〇〇種類あると考へられているが、近隣諸国を
 はじめ、遠くヨーロッパ、中近東の昔話と類似するも
 のもある。偶然の一致とする考へ方もあるが、単一モ
 チーフの単純な話の場合には、偶然の一致と考へるこ
 ともできるが、長い話の起承転結がほとんど一致して
 いる場合には、系統関係があると思へる方が自然であ

る。日本文化の多くの分野で、各方面からの流入が、
 長期にわたつて行われてきたことをみれば、昔話につ
 いても、同じことを考へることができる。『天人女房』
 『米福栗福』『天福地福』『大工と鬼六』『さるかに合戦』
 など。昔話は、時代、場所、人物が不特定で、内容を
 真実として信じられることを求めていないが、伝説は、
 時代、場所、人物を特定し、共同体の歴史として信じ
 られることを求めている。昔話は、一定の語りの様式
 をもつて語るが、伝説は事がらを伝えればよいので
 あつて、一定の様式をもつていない。昔話の語りの様
 式は、それが口で伝えられた文芸、すなわち、時間に
 乗つた文芸であることからくるものと思われる。「昔話
 は語られる時間のなかにのみ存在する」ということは、
 昔話を考へる場合、常に必要な認識である。昔話は時
 間的文芸であるがゆゑに、簡潔な語りを好む。詳細な
 状況描写や心理描写に陥ることなく、主人公中心に、
 主たるでき事を、速いテンポで語る。そして三回めの
 繰り返しは、ほとんど同じことばで繰り返す。いろい
 ろな形の繰り返しは、時間的文芸にとつて、音楽と同
 じように、重要な表現法である。事がらは写實的に
 は描かれず、中味を抜かれて、ことばだけで語られる。
 それによつて昔話は、世界のあらゆることを取り入れ
 ることができるのである。昔話は、勸善懲惡の物語と
 してよりも、多様な人間像、とくに若い時期の成長の

姿を語るものとして理解されるべきものである。

【参考文献】関敬吾『昔話の歴史』（一九六六 至文堂）、F・ライエル『昔話とメルヘン』（山室静訳、一九七一 岩崎美術社）

椋 鳩十 はむく ほとじゅう 一九〇五〜八七（明38〜昭62）小

説家。本名久保田彦穂。長野県下伊那郡喬木村阿島に生まれる。長野県立飯田中学から一九二三年に法政大学国文科に入學、当時法政大学教授であった豊島与志雄、森田草平の知遇を得、同年佐藤惣之助主宰「詩之家」の同人となり、詩集『駿馬』（一九二六）、『夕の花園』（二七）を刊行。詩友潮田武雄、竹中久七、渡辺修三とともに詩誌「リアン」（二九）を刊行。「綴方生活」に処女童話『不思議な瓶』（二九）を発表。三〇年法政大学卒業と同時に鹿児島県熊毛郡中種子高等小学校代用教員となり、その夏同県始良郡加治木高女教諭となる。「リアン」同人を辞す（三三）。三三年、前年より書きためていた山窩小説をまとめ『山窩調』と題し自費出版。この時から椋鳩十のペンネームを使用。「東京日日新聞」「人物評論」「都新聞」「中央公論」「経済往来」「朝日新聞」などに山窩小説を執筆。小説集『鶯の唄』（三三）を刊行。これは発売一週間で良俗に反するという理由で発売処分を受けた。三三年「少年倶楽部」の編集長須藤憲三は椋の山窩小説を読み、少年ものが書けると確信し、椋に執筆を依頼。椋は四年後に動物小説『山

の太郎熊』（三八・一〇）をもって、これにこたえる。その後同誌に『金色の足跡』（三九・新臨増）、『大造爺さんと雁』（四一・一一）、『月の輪熊』（四二・一）、『栗野岳の主』（四二・二）など、四三年までの間に一五編の動物小説を発表。四七年、鹿児島県立図書館長に就任。

「少年」に『片耳の小鹿』（五〇・八）を発表。「学校図書館文庫」の一冊として、短編集『片耳の小鹿』（五一）を刊行。翌年、文部大臣奨励賞を受ける。「読切特撰集」に一〇年（三一〜四二）にわたり動物をテーマとした成人向けの小説を発表。また、「母と子の二十分間読書運動」を構想し、鹿児島県下でスタート、やがて全国に広がる。「読切特撰集」に書いた鶯の物語を児童向きに書き改め『大空に生きる』（五九）と題して出版、未明文学奨励賞を受賞。その後『孤島の野犬』（六三）によりサントリー児童出版文化賞、国際アンデルセン賞国内賞を受賞。六六年鹿児島県立図書館長を退任、翌年鹿児島女子短大教授に就任（児童文学、図書館学）附属図書館長を兼任した。読書運動の功績によりモービル児童文化賞受賞（六八）、その後も旺盛な創作活動を続け『マヤの一生』（七〇）、『モモちゃんとかかね』（七二）、『けむり仙人』山脈（七二）、『ネズミ島物語』（七三）、『けむり仙人』（七四）などを出版。赤い鳥文学賞（七二）、児童福祉文化奨励賞（七二）を受賞。七八年鹿児島女子短大を定年退職し著作に専念。『椋鳩十全集』全二六卷（七四〜八二）

を出版。それまでの全業績を収録した『椋鳩十の本』全二五巻・補巻一(八二〜八四)により、芸術選奨文部大臣賞を受賞。

「大造爺さんと雁」^{だぞうじいさんとがん} 童話。初出一九四一年一月「少年倶楽部」、のち『動物ども』(一九四三)収録。沼地に集まる雁は、残雪という賢い頭領に引率され、狩人大造じいさんの計略にもはまらない。はやぶさが逃げ遅れたおとりの雁を襲った時には、身を挺して戦い、自らは傷つく。大造じいさんは残雪の勇氣と、頭領らしい態度に深く感動する。すぐれた動物物語として小学校国語教科書の共通教材ともなり、広く読まれている。

【参考文献】たかしよいち『椋鳩十の世界』(一九八二 理論社)、本村寿一郎『聞き書き椋鳩十のすべて』(一九八三 明治図書)、阿部真人『椋鳩十文学の研究』(一九八四 大日本図書)

(たかしよいち)

向川幹雄 ^{むかしかみお} 一九三六(昭一) 児童文学研究者。福井市に生まれる。大阪学芸大学卒業後、

大阪の公立小学校に勤務。大阪教育大学大学院修了。

帝国女子大学、埼玉大学を経て現在、兵庫教育大学助教授。『講座日本児童文学』に収められた『浜田広介論』をはじめ、日本児童文学史の書誌学研究に多くの業績を残す。主な編著書『資料・戦後児童文学論集』全三巻(一九八〇)、『校定新美南吉全集』全一二巻・別巻二

(八〇〜八三)。

(大藤幹夫)

無国籍童話 ^{むこくせき}

第二次大戦直後、一九四七年

ごろを頂点とする児童雑誌興隆期に、それらを主な舞台として発表された作品群のうち、社会風刺の傾向が強い空想的作品についての呼称。波多野完治による命名とされているが定かではない。特定個人による意識的概念規定が明らかでない見当たらないが、たとえば四七年の段階で、猪野省三が筒井敬介『少年記者ブル君』の書評中「国籍不明の人物」を書いたことに對する批判を行っている。当時発表された筒井敬介『コルプス先生汽車へゆる』(四七)『子供の広場』、平塚武二『ウイザード博士』(四八)『銀河』を典型とする一連の作品は、「国籍不明」の片かな名前という顕著な特色と同時に、社会風刺的性格を強くもっていた。そのため、敗戦後の社会状況を表面的に写し換え批判した作品や、動物などに仮託して戦後理念を説いた作品なども含めて、「無国籍童話」の名のもとで批判の対象とされてきた傾向が強い。

(西山利佳)

ムサートフ アレクセイ・И Алексей Иванович

Москва 一九二一〜七六 ソビエトの児童文学作家。

モスクワ近郊の農家に生まれ、一九三〇年代の農業集

団化、第二次大戦による破壊、戦後の復興を直接体験。

国家賞を受けた代表作『こぐま星座』(一九四九)をはじめ、『Дом на горе 山頂の家』(五一)、『疾風の中で』

(六七)などの作品において、労働への愛をテーマに、子どもたちを主人公にして、コルホーズの生活を描き続けた。

(小宮山俊平)

武者小路実篤

むしゃのこうじ
さねあつ

一八八五—一九七六(昭五)

小説家、劇作家。東京の生まれ。学習院大学を経て、東京大学社会学科中退。一九一〇年、志賀直哉、木下利玄らと同人誌「白樺」を創刊、その中心メンバーとして活躍する。初期の作品に小説『お目出たき人』(一九一三)、『世間知らず』(一九一四)などがあり、第一次世界大戦中には戯曲『その妹』(一九一五)、『或る青年の夢』(一九一六)などを「白樺」に発表、注目される。一八年宮崎県に理想郷をめざして「新しき村」を建設、話題を呼ぶ。以後、晩年まで多彩な文学的活動を続けた。代表作に『友情』(一九一七)、『或る男』(一九二二)、戯曲『愛慾』(一九二二)などがある。児童文学にも関心を示し、多くの短編童話のほか、長編に『少年国を護る』(一九三三)、『日本太郎』(一九三九)などがある。成人を対象とした作品の中にも、『宮本武蔵』(一九三四)、『塙保己一』(一九三八)、『祖先さん祖母さん』(一九三九)など、年齢の高い児童なら鑑賞できるものが多い。ほかに童話集『はね子の夢』(一九四八)がある。

無着成恭

むじやうせいこう

一九二七—

(昭二)

教育者。

(関口安義)

山形県に生まれ、山形師範卒業後中学校教師。のちに、駒沢大学卒。明星学園教諭として、その教育実践の

推進力となった一時期がある。山形県の中学校教育の成果としての作文集『山びこ学校』(一九五六)は、世間から大きな評価を受けた。また、日本作文の会、教育科学研究会国語部など、民間教育運動の大きな力になった。現在は、教育評論活動に活躍。曹洞宗ボランティア会理事も務める。

(赤座憲久)

棟方志功

むなかた
しこうた

一九〇三—七五(昭五)

版画家。

青森に生まれる。一九二四年、画家を志して上京、帝展に油絵、春陽会に版画を出品したが、版画を専らとし、国画会に主要作を発表。三六年の「大和し美し」が柳宗悦、河井寛次郎など民芸運動家に高く評価され、五六年ベネチア国際ビエンナーレで「柳緑花紅頌」が国際版画大賞となり、七〇年、文化勲章をうける。「棟方志功全集」全一二巻(七七—七九)、自伝に『板極道』(六四)がある。児童文学に関しては早く、三一年刊の「児童文学」第二冊発表の宮沢賢治の童話『グスコーブドリの伝記』に付けた挿絵をはじめとして、諸種の雑誌や童話集に装幀・挿絵の筆をふるい、児童におもねらぬ画風が異彩を放った。

(匠 秀夫)

ムナリ ブルーノ Bruno Munari 一九〇七—イ

タリアの代表的な芸術家、画家、彫刻家、デザイナー、絵本作家。ミラノ生まれ。ナポリの工芸学校で学び、玩具の設計などをしデザイナーを志す。一八歳でミラノに戻り未来派の人たちに接し、展覧会に「役に立た

ない機械」を出品しデビュ、音を出す彫刻」、**「動く美術」**や**「偏光による映写」**など発表、その特異な制作は東京での個展（一九六五）で禪の心に通うものとの評を受ける。米ハーバード大学（六七）で視覚コミュニケーション、デザイン講座担当、さらに幼児対象の教授法を研究、ミラノの美術館などに、子どものための実験室を設計、実現している。『たんじょうぶのプレゼント』（四五）をはじめ仕掛け絵本一〇冊は戦後絵本の創始といえる。この絵本はサイズの違う紙を重ねてとじ、画面を大から小へ、小から大へと変化させる。ほか切り抜き、折り込み、蓋紙のはりつけなど、機知と遊びに富んだしかけをみせる。『きりのなかのサーカス』（六八）はグラスファイバー紙の乳白色と半透明の質を生かし、霧の中を進むシーンを現出している。『ブルーノ・ムナリのABC』（六〇）や**「木をかこう」**、『太陽をかこう』（八〇）など、装飾画風なフォルムと構図に明るい色彩、科学の要素を織り込む発想で、絵本を既成の形から脱出させ、限らない可能性を開発する方向をもたせたものといえよう。

（森久保仙太郎）

村井菘斎（むらいけんさい） 一八六三—一九二七（文久3—昭2）

作家、新聞記者。本名寛。愛知県豊橋市生まれ。五歳の時父に伴われて上京したが、明治維新で家が没落。

一八八四年、サンフランシスコで苦学中に知り合った*天野龍溪の紹介で、「郵便報知新聞」の客員となった。

八八年処女作『加利保留尼亜』を発表。九六年から一二〇〇回にわたって『報知新聞』に連載した『日の出島』は大人気を博した。『少年文学叢書』に紀国屋文左衛門を伝した『紀文大尽』と中江藤樹を描いた『近江聖人』（以上一八九二）があり、後者はとくに多数の読者を獲得した。

（二上洋一）

村岡花子

（むらおかはなこ）

一八九三—一九六八（明26—昭43）

翻訳家、児童文学作家。山梨県甲府市に生まれ、のちに東京へ転居。一九一四年東洋英和女学校高等科卒業。山梨英和女学校で英語を教えたのち、教文館で、婦人子ども向けの本の編集に携わる。村岡徹三と結婚。二七年、同人誌『火の鳥』を創刊し、創作活動に励む。

同年、最初の翻訳、マーク・トウェインの『王子と乞食』が出て好評を博し、ポーターの『喜びの本』（二九三九）で、翻訳者としての地位を確立した（現在は『少女パレアナ』と改題）。三二年から一〇年間JOAK（現在のNHK）の「コードモの新聞」の放送を担当し、子どもたちから「ラジオのおばさん」と親しまれた。童話集に『紅い薔薇』（一九二六）、『お山の雪』（二八）、『青いクツ』（四〇）、『桃色のたまご』（四八）などがある。また随筆集『母心抄』（四二）や、人生論も書いている。戦後は、新しい少女小説を次々に翻訳し、我が国の青春小説に新風を送り込んだ。とくに、モンゴメリの『赤毛のアン』（五二）は、少女たちに熱狂的に受け入れら

れ、全一〇巻を訳出した。そのほか、主な訳書には、モンゴメリの『エミリー・ブックス』三巻、パール・バックの『母の肖像』、デイケンズの『クリスマス・カロール』、バーネットの『小公子』、『小公女』、オルコットの『若草物語』などがある。六八年一〇月二五日急病で歿。

(谷口由美子)

村上 勉 むらかみ つとむ 一九四三(昭18)挿絵、絵本画家。兵庫県出身。八鹿高校卒。デザイン、イラスト、水彩、油彩を学ぶ。一九六二年佐藤さとると出会い、その後同氏の作品の挿絵が多く、『コロポックル物語』佐藤さとるとる全集』一二巻ほか多数。『おおきなきがほしい』(一九七二)でライプチヒ国際図書展銅賞、『おばあさんのひこうき』(七三)、『宇宙からきたかんづめ』(七八)で小学館絵画賞を受賞。絵本では『あいうえお』(七二)、『てがみをください』(七六)など多数。

(山本道子)

村上松次郎 むらかみ まつじろう 一八九七―一九六二(明30)昭37)挿絵画家。東京に生まれ、武内鶴之助に洋画を師事し、昭和初期から現代もの、とくに海洋小説や軍事小説の挿絵、また軍艦や海戦の口絵を執筆した。写実的ではあるが細部にとらわれないおらかな筆致で明るい雰囲気を漂わせた画面に特色を示した。代表作に*平田晋策『昭和遊撃隊』(一九三四)、*新戦艦高千穂』(二二五、以上「少年倶楽部」)、南洋一郎『聖火の島』(三

八「少年倶楽部」などがある。(渡辺圭三)

村野四郎 むらの しろう 一九〇一―七五(明34)昭50)詩人。東京府北多摩郡多磨村に生まれる。慶応大学経済学部卒業。新即物主義の実験作品集である『体操詩集』(一九三九)で、第六回文芸汎論詩集賞を、詩集『亡羊記』(五九)で、第一回読売文学賞を受けた。詩集は、ほかに八冊、詩論も多い。戦後童謡も書いた。ポヘミア民謡に日本語詩を当てた『ぶん ぶん ぶん』は愛唱されている。『こどものむさし9』(四三)、『ニーベルゲンの宝』(四九)などの童話もある。(薩摩 忠)

村山亜土 むらやま あど 一九二五(大14)児童劇作家。劇作家、演出家であった村山知義の長男として東京都に生まれる。母村山篤子^{*}は童話作家であった。旧制成城高校を卒業。在学中に『動物の町』を発表、教訓的な学校劇作品の多い中でそのイメージは鮮烈であった。その後『コックの王様』(一九六八)、父と共に『ロビンフッドの愉快な冒険』(五一)を刊行。一九六〇年『新猿蟹合戦』で日本児童演劇協会賞受賞。

(しかたしん)

村山篤子 むらやま かくし 一九〇一―一九四六(明34)昭21)児童文学作家。旧姓岡内。香川県高松市生まれ。有名な薬製造・販売元千金丹本舗の長女として、裕福な生活を送る。高松高女を経て上京、一九二一年羽仁もと子園長の自由学園高等科に第一期生として入学。在学

中の二二年、園長に文才を認められてルポルタージュ『ミセス安仁大森の有隣園を観る』を「婦人之友」に発表。二三年同学園卒業後「婦人之友」記者となり、翌年はじめから「子供之友」に童謡、つづいて童話を発表し、同誌の編集に従事。この年の夏、劇作家、童画家、演出家として活躍することになる村山知義と結婚。二九年日本プロレタリア作家同盟員となり、「少年戦旗」に童話『こほろぎの死』を発表。のち同誌の編集長に選ばれる。三〇年からたびたび、夫の治安維持法違反で獄につながれるにもなう経済的家庭的な苦しみを味う。「子供之友」のほか、「幼年倶楽部」、「コドモノクニ」などに、数多くの幼年向き作品を発表し、戦前の数少ない女性の幼年童話作家であった。三九年に肺疾で数回咯血したのが、戦時中に再発し、戦後児童文学者協会創立会員として協会内の児童文学端正委員会委員となったが、衰弱が激しく、四六年八月死去。箒子童話は、動物や野菜や台所用品を主人公に、知的ユーモアに富んだ作品が多い。生前に童話集の刊行はなかったが、歿後『きりぎりすのかひもの』(四六)、『のねこさんときんのくつ』(四七)などが出版された。

村山桂子

むらやまけいこ

一九三〇—(昭五)

童話作家

(五十嵐康夫)

お茶の水女子大学保育実習科卒業。その後、幼稚園に勤めていたが一九五三年日本童話会に入会して後

藤檜根の指導を受ける。六五年幼稚園を退職して家庭に入り幼年童話を書く。六三年幼児の日常感覚にあふれた絵本『たろうのおでかけ』によってデビュー。続いて出した絵本『たろうのともだち』(二九六七)、『たろうのばけつ』(六八)で幼児たちの人気を得る。幼年童話の主な作品として『オニタのかいもの』(六五)、『ころころとゆきだるま』(七〇)、『もりのおいしやさん』(七〇)、『カンガルーのルーおばさん』(七四)、『コンタのクリスマスケーキ』(七八)、『ゴンとホットケーキ』(七八)などがあり、いずれも保育経験を生かしての優しく、温かな筆遣いと幼児の素朴な感情を親しく捉えるストーリーづくりがうまい。現在も日本童話会のベテラン作家として会の仕事を助けている。(西本鶏介)

村山知義

むらやまともよし

一九〇一—七七(明34—昭52)

劇作家、演出家、画家、舞台美術家、小説家。東京神田に生まれる。開成中学から第一高等学校を経て東京帝国大学哲学科中退。学生時代から母元子の勤める婦人之友社の「子供之友」に童話や童画を発表。一九二二年には同社から処女出版の童話集『ロビンフッド』を出版、続けて「お城シリーズ」として『リップ・ヴァン・ウインクル』『或るコックの話』(一九二二—二四)など五冊の童話集を出す。二二年から二三年にかけてドイツに遊学、前衛美術、演劇に触れて帰国して以後は、前衛美術家から、プロレタリア演劇の作家、演出家、

劇団の指導者として大活躍する。だが、処女出版が童話であり、夫人が童話作家の村山鶯子であることは注目してよいだろう。児童劇作家の村山亜土は長男。新劇の劇作家、演出家、小説家としての仕事は数が多く多彩で超人的と評される。戯曲の代表作は『村山知義戯曲集』上下二巻(七二)に収められている。戦後の小説『忍びの者』五部作(六二―七二)が広く知られ、『演劇的自叙伝』三巻(七〇―七四)がある。『私たちの劇』(四九)、『演劇入門』(四九)などの子どもや青年のための演劇の指導書の仕事もある。(富田博之)

室生犀星 むろせいせい 一八八九―一九六二(明22―昭37)

詩人、小説家。石川県金沢市の生まれ。高等小学校三年で中退し、金沢地方裁判所の給仕をしたりしながら、詩や小説の習作に没頭。また「北国新聞」の俳句欄に投稿、入選を重ねる。一九一八年処女詩集『愛の詩集』および『抒情小曲集』の刊行によって詩人として認められる。一九年『幼年時代』の性に目覚める頃を發表、新進小説家としての地歩を築く。以後『蒼白き巣窟』(一九二〇)、『あにいうと』(三四)などで市井の男女の生活を好んで取りあげ描いた。戦後も『杏つ子』(五六―五七)などの力作を残している。児童文学作品は、『赤い鳥』に『寂しき魚』(二二)ほか二編と『童話』に『星と老人』(二二)ほか一編を載せたものにはじまり、のちには講談社発行の「幼年倶楽部」や「少年倶楽部」、

小学館発行の学年別学習雑誌にも寄稿している。創作童話のほか中国ものの再話や日本古典の翻案、それに少女小説もある。犀星童話はやや観念的で、回想や郷愁に執筆のモチーフを得ている。が、二、三の幼年童話には今日の子どもの鑑賞にも十分耐える作品が見いだせる。童話集に『翡翠』(二五)、『四つたから』(四一)、『鮎吉・船吉・春吉』(四二)、『オランダとけい』と『(四八)』、少女小説集に『乙女抄』(四二)、『臉のひと』(四二)、童謡に『動物詩集』(四三)がある。六二年三月二六日歿。

【参考文献】 奥野健男『室生犀星名作集』解説(一九六五)『少年少女現代日本文学全集31』 偕成社、久保忠夫『室生犀星解説』(一九七七)『日本児童文学大系9』ほるぷ出版 (関口安義)

室崎琴月 むらさき